

登高（杜甫）

風急に天高くして猿嘯哀し

渚清く沙白うして鳥飛び廻る

無辺の落木 嘯々として 下り

不尽の長江 滾々として 来る

万里 悲秋 常に 客と 作り

百年 多病 独り 台に 登る

艱難 苦だ 恨む 繁霜の 髪

潦倒 新たに 停む 濁酒の 杯

風急天高猿嘯哀 渚清沙白鳥飛廻
無邊落木蕭蕭下 不盡長江滾滾來
萬里悲秋常作客 百年多病濁登臺
艱難苦恨繁霜鬢 潦倒新停濁酒杯

解説 九月九日のいわゆる重陽の節句の日に高殿に登って作ったもの。

語釈 ※登高Ⅱ中国の行事の一つ。陰曆九月九日に高い所にのぼって菊酒を飲み、厄払
いをする。※猿嘯Ⅱ猿の鳴き声。※無辺Ⅱ果てしない。*落木Ⅱ落葉のこと。

※蕭蕭Ⅱざわざわと。葉の落ちる音の形容。※不尽Ⅱいつまでも流れて尽きない。

※涼猿Ⅱ水のあとからあとから流れる形容。※万里Ⅱ故郷から万里も離れている。

※百年Ⅱ生涯。死ぬまで。※多病Ⅱ病気がちなこと。※繁霜鬢Ⅱ耳ぎわの毛髪がまっ

白になったこと。※潦倒Ⅱ老いさらばえるさま。※新Ⅱくしたばかり。※停Ⅱやめる。

通釈 高殿に登って、あたりを見渡すと、秋風は激しく吹き、空は高く晴れわたって、猿の鳴き声がもの悲しく聞こえてくる。下を見ると、渚の水は清く澄み、岸の砂は白く、その上を鳥が飛びまわっている。あたり一面の落葉はざわざわと地に落ち、尽きることのない長江の水はこんこんと流れ下っている。故郷から万里の地に在って、秋を悲しみながらいつも旅人の身の上、死ぬまで病気がちの身を、たった一人で高殿に登っている。今まで多くの苦労を重ねた為に、びんの毛がまっ白になったのがうらめしく思われる。老いた私は、この頃、体の具合が悪く、濁り酒を飲むことさえやめてしまった。